

## ドイツのリアリストから見た EU とヨーロッパ政策」：報告の成果と課題

葛谷 彩（明治学院大学）

戦前ドイツの主流な知的伝統であったリアリズム的思考は、戦後西ドイツの国際関係論においては一貫してマイノリティー的位置づけに止まっていた。その理由として、1) 歴史的背景（ナチス・ドイツの政治的・精神的破綻（ホロコーストと敗戦））2) 国際政治的背景（戦勝国による占領、冷戦、東西ドイツ分断）が指摘される。両者への回答として確立されたのが、多国間主義、非軍事主義、一方での大西洋同盟(NATO)と他方での西欧統合(EC)という多国間枠組みを重視する西側統合路線を旨とする戦後西ドイツ対外政策であった。冷戦の終焉と東西ドイツ統一など 90 年代の世界政治の変動に際しても、政治的配慮もありドイツ国内では旧西独の対外政策との連続性を強調する議論が優勢であった。しかしグローバル化、安全保障における対米依存の低下、欧州統合の拡大と深化などドイツをめぐる国際環境の変容、さらに米のイラク攻撃への反対を始めとする第二期シュレーダー政権の対外政策に顕著な自己主張の傾向の高まりを受け、近年ドイツ対外政策の変容をめぐる議論が再活性化している。かかる変容はリアリストの中でも、大西洋派と欧州派の間の論争を引き起こすに至った。本報告は、かかる国際環境とドイツ対外政策における変容を受けて、ドイツを代表する欧州派のリアリストである Werner Link の論考を手がかりに、国益と軍事力を重視するリアリストが EU をどのように評価し、またドイツがいかなるヨーロッパ政策をとるべきかと考えているかを概観することによって、国際政治における EU の位置付けとドイツのヨーロッパ政策を理解及び展望するにあたって、リアリズム的視点が与える示唆を考察することを目的とする。まず Link の理論的前提として、ある国家のヘゲモニーの追求とそれに対する他国の勢力均衡政策という視点が示され、同視点に基づく彼の国際政治観（多極化する世界）、欧州統合と米欧関係の連関の歴史的分析（欧州内外における勢力均衡という近代欧州秩序における基本問題としてのドイツと欧州の関係の再編、及び米国やロシアなどの大国との対外関係の問題の指摘）が明らかにされる。次に国際政治のアクターとしての EU についての評価（多極化する世界の中で経済的には一極をなすアクターとして米国に対する balanサーであるが、地政学的には未だ至っておらず、極としてヘゲモニー的な米国に対して協調的均衡政策をとるためには、ESDP の一層の強化とその中核となる独仏協力の強化の必要であると強調）ドイツのヨーロッパ政策の評価（欧州統合の深化と国際政治アクターとしての EU の発展が 21 世紀始めのドイツの国家理性であることが、多極化する世界、EU 内の勢力均衡とその共同リーダーシップを担う大国としてのドイツ、米国との対等なパートナーシップという観点から正当化）さらに独仏枢軸の強化より対米協調優先を唱える大西洋派に対する Link の批判が明らかにされる。結論では、Link のリアリズム的視点が EU 内の国際政治と EU の対外関係における権力政治的次元を浮き彫りにしたことに意義があるとし、さらにドイツが両者において果たす役割（一方での統合の推進、他方でのフランスや中東欧諸国との摩擦の拡大）に対して示唆するものがあることが指摘される。今後の課題としては、1) ドイツのリアリズムをディシプリンとしての国際関係論にとどまらず、より広い文脈で再定義することの必要性、2) Link 自身のリアリズムについてのより深い考察と他のリアリストの議論との比較、3) ドイツのヨーロッパ政策に対するリアリズム的視点の有効性と限界についてのより一層の考察が挙げられる。